

(2014. 9. 25)

本年8月の日照時間は、新聞報道では平年の40%ということであるが、私の感覚ではもっと少なかったという感じである。8月に入って、本当に晴れた日というのは、ほんの数日ではなかっただろうか。日照不足と連日の雨に、多くの農業被害が生じ、私の今年のイチゴ苗も大きなダメージを受けた。さらには、真夜中の集中的豪雨による「広島土砂災害」は未だ復旧途上である。そんな「いい思い出のない夏」であったが、私の心を熱くしてくれた出来事があった。



全国高校軟式野球選手権大会の準決勝、延長50回となった崇徳対中京の試合のことである。TVに放映されたスコアボードには、手書きの歪んだ数字で、ゼロが50回並んでいた。前代未聞の「記録」、そして「珍事」として新聞、TV等のマスコミに取り上げられた。軟式野球が、このように注目されたことは、これまでになかったし、これからもないに違いない。高校野球と言えば「甲子園」であったし、軟式は全国大会であっても、新聞の片隅に小さな記事が載る程度の存在であった。

高校での軟式野球部というのは、硬式野球部のない高校は別として、何らかの事情で「硬式」に入れなかった「野球少年」が行くところである。理由は、野球の能力、体格や体力、学業との両立、親の経済的負担などなど、各人各様いろいろであるが、「それでも野球がやりたい」という者が入部するのが軟式野球部なのである。

私の良く知るY君も、ゆえあって高1の夏に硬式を退部して軟式野球部に入った。彼は崇徳高校軟式野球部の16年前のOBである。彼はたまたま軟式全国大会の開催された明石市に住んでいるおり、現在は理学療法士として、整形外科病院に勤務している。準決勝2日目、延長30回を終えた時、彼は昼間の勤務を終えた後に、見ていられなくなり、後輩たちのいる宿舎に行き、マッサージをほどこしたという。長時間の試合で、彼らの足の筋肉はパンパンに張って、踏ん張りがきかない状態であったが、投手と内野手を中心に、2日間にわたって治療したようである。彼は高校時代に世話になった軟式野球部に、やっと「恩返し」をする機会ができたことを喜んでいた。

彼が高校時代に、私たちも県大会、中国大会、さらには明石での全国大会と、ずいぶん応援に行ったものである。仕事の繁忙期と重なると、休日に遠方に行くのは、辛い面もあった。しかし、軟式野球部には、野球に真剣に取り組みつつも、のびのびと楽しむ雰囲気、選手にも父兄にもあったと思う。その点が、「甲子園出場」をめざして、長時間の過酷な練習に明け暮れている「硬



式野球部」と異なっていた。たびたび開かれた野球部父兄の懇親会も、「羽目を外し過ぎの飲み会」であったが、今となっては、私の人生の「楽しい思い出」の1ページとなっている。

4日間で10時間18分にも及ぶ激闘の「敗者」となった崇徳高校の「野球少年」たちは、「勝者」となった中京の応援席に交じり、宿敵の応援団と一緒に、飛び跳ねながら懸命の応援をしていた。それはTVの報道番組に映ったほんのワンカットであったが、その風景を見て、私はジーンと胸が熱くなる思いがした。野球というスポーツの素晴らしさに、改めて気づかせてくれたし、それは「甲子園」で優勝する以上の「価値ある敗北」であったと思うのである。



「ホンマに、こんならエエ奴じゃと思うよ。若い時に、こういう体験をするのは、エエことよのう。ワシにやなかったけえ、うらやましいワイ」